

関 芳雄（陸13期）氏の講話

「防大を振り返って・・・「そのとき」、私は、どうしたか」

1 はじめに

- (1) 自己紹介・・・4年前に退官、現在（株）セーフティネット統括部長
- (2) 見事、難関を突破しての入校に対する祝福と期待（国の宝）
- (3) 入校して5日目、着校から10日以上過ぎての状態・・・様々な思い
「気に食わぬ 風もあるうに 柳かな」（川柳）・・・今も、これからも続く、不安はあって当然で、ない人は少ない(期待と不安)
- (4) 自衛隊勤務での鮮烈な思い出は、阪神淡路大震災に3ヶ月間出動して、撤収時、神戸市民から「自衛隊さん、有難う」という感謝の声と掲示されたビラの文言を頂いたこと。・・・その時、自衛官であったことに自然と誇りを覚えた。
- (5) 防大生活の3本柱・・・①大学生としての「学問」、②将来幹部自衛官としての「訓練・防衛学を含む学生舎生活」?社会人・学生としての「校友会活動」

・・・3本柱のバランスが大事（学年により、人により重心は異なる）

2 入校の動機が余り純粋でなかった「その時」

- (1) 白い制服に憧れ、心身の鍛錬、世界一周の夢実現のため・・・制服は着れた、心身は鍛えられた、しかし世界一周の夢は実現できなかった。
- (2) 世界一周の夢は、海自要員に選ばれなかった時に決まったが、『その時』は、残念無念の気持ちで悔し涙を流した。更に追い討ちをかけたのが、卒業後、海自の同期からの一言「遠洋練習航海は、世界一周になったよ」・・・それを聞いて「くそったれ!!」とつぶやいたのを今でも覚えている。でも今は、そのことにそれほどの後悔の念はない。
- (3) 入校の動機は、「国や国民を守りたい」「国際貢献をしたい」「高度な学問をしたい」「お金が掛からない」「集団生活をしたい」「他大学が落ちたから」等、温度差が違うさまざまな動機があるが、私はそれでよいと思う。

かえって、立派で、揺るぎのない、素晴らしい動機の人、現実との乖離で、途中で挫折してしまう例を多くみてきた。きっと堅すぎて、折れやすいのかもしれない。

10代で、固まる必要はない。立派とはいえない、軽くて、純粋でない動機は、意外と順応性があり、しなやかなだけに、途中で折れることが少ない。信念や使命感や愛国心等は、これからの防大生活の中で徐々にじっくり固まっていけばよいことである。

動機は、あくまで「方向性や選択や行動」を起こす刺激やキッカケであり、状況の進展に応じ変化していくものである。従って、動機云々に余りこだわる必要はないと思う。

3 同期とはいえ、人間模様が色とりどりであった「その時」

- (1) 全国から選ばれた、頭も優秀、身体も健全な人達の集まり。しかし感情・心は、一人一人異なり、その性格・態度は十人十色。それゆえ、自我が強いと言える。

(2) さらに、育った環境、風土が加わり、そこには当然、感情の対立・衝突・議論が生じる。

『その時』私も入校後、しばらくは同期と衝突したり喧嘩したりした。引くことを知らないやんちゃな学生、負けず嫌いな人間であった。

(3) 学年が進むにつれ、又色々な同期と付き合うことにより、相手の性格や言動、そして気持ち分かるようになった。やはり日常のコミュニケーション・交流が極めて大事。このとき、青年らしく本音での言い合い、付き合いが必要。

「強がりには、いずれ崩れる。時には弱音を吐く強さも必要。その世代に応じた自然体・人間らしさこそが、長持ちする」と今つくづく思う。

特に、性格的に弱い人は、ストレスを抱え込んだり、抑圧してしまうことがあるので、同期同士で支え合う気持ちが大切。

(4) このように、色々な人間模様をかもし出す中での生活は、対立や議論から協調や合意に転換し、より人間関係を深めることにも通じ、人生を豊かにするし、社会勉強として、大いに役立つものと思う。

また「幸福や楽しい事を人に話せば、倍加する。不幸や嫌なことを人に話せば、半減する。」と言うように、何でも話せる同期を作って欲しい。いずれにしても、「困ったり、悩んだりした時の支え」は、同期である。横のつながり、即ち同期の絆を強いものに育てて欲しい。

13期生会も、4年前から毎年、同期生会を東京で夫婦同伴で盛大に、楽しくやっている。私は、死ぬまで同期生会の作業員を命じられている。

4 希望が叶えられず落ち込んだ「その時」

(1) 2年生になる時に、陸・海・空要員の志望選考があったが、私は海上を希望し、将来は潜水艦乗りになりたいな！と思い、少しでも有利なように8キロ遠泳や10メートルからの飛び込みに挑戦し、成功した。しかし無念にも、海上ではなく、陸上であった。その時は、相当落ち込み、本気で防大を辞めようと思った。

そこで、当時の指導官に、「海上に行けなかったので、防大を辞めたい」と申し出たら、指導官曰く『お前は陸が向いているよ。防大を辞めたいなら辞めても良いよ。』と言う、全くつれない返事であった。

『その時』私は、「そんなにあっさり辞めても良いよ。」と言われるとは思わず、「まあ～そう言わず辞めるなよ」と、少しは同情して引き止めてくれるかなと期待していた面もあった。この期待はずれの対応に、私は逆の気持ちが湧き上がり、辞めることを取り消して、「よ～し、陸でやってやるぞ！」と言うことになった。今は、陸に行ってよかったと思うし、悔いはない。指導官のあっさりした対応に、今は感謝している。

(2) 3年生になる時に、学科の専攻希望があり、私は好きな応用化学を希望したが、基礎II（機械工学の基礎：現在なし）に回され、ガックリきた。当時、応用化学は、人気があり、希望者も多かった。反面、出来立ての基礎IIは希望者が少なく人気がなかった。

『その時』私は、陸海空要員選考もフラれ、今度は学科専攻もフラれ、2年連続希望通り行かなかったことに、自己の無能さを知らされ、自己不信に陥りかけた。

ところが、当時の中隊指導官が、朝礼時に『今人気のあるところは、いずれ衰退する。今人気のないところは、これ以上、下がることはない。後は上がるだけだ。希望が多いところは競争も激

しいし、上位に位置するのは難しいが、希望が少ないところは、頑張れば上位の位置を占めることが出来る。人が嫌がる所を目指すのも、一つの生き方だ。腐るな！頑張れ！』と言うお話があった。

このお話を聴いて、目からうろこが落ち、ファイトが湧き出した。なるほど、表舞台は華やかでも、裏に回ればそれなりの苦労もある。裏舞台は、目立たないが、それなりの楽しさや嬉しさがある。と思うようになったし、心に引っ掛かっていたモヤモヤが消えた。当時の指導官に、今も感謝している。

又、この2つの大きな挫折感のお陰で、他人の痛みが分かるようになり、後々の部下指導に大いに役立った。

5 クラブ活動に明け暮れた「その時」

(1) クラブ活動は、フィールドホッケー部に入部し4年間無事やり遂げた。入部に際しては、色々なクラブの上級生から勧誘があり、どこに入部するか相当悩んだ。最終的には、高校時代まで色々なスポーツを経験してきた関係から、今までにやったことのないホッケー部を選んだ。指導者も上級生も同期も素晴らしい人達で、練習は極めて厳しいものがあったが、明るい雰囲気中で、伸び伸びとクラブ活動に専念できた。

(2) 夢実現は、初めて4年生の時に訪れた。入部した時に、「4年生になったら、主将になり、関東1部リーグで優勝したいな」と言う夢をひそかに抱き続けていたが、4年の春季リーグで本当にそれが実現してしまった。

実現した『その時』は、今までフラレの学生生活から一転して、夢が叶えられたこと、又、スポーツ新聞に『防大旋風吹き荒れる』と言う見出しでデカデカと記事が掲載され、先輩はじめ多くの人達から注目されたこと等、部長・監督・コーチはじめ、部員全員で嬉し涙を流した。これまでのきつい練習とチームワークのお陰と、しみじみ実感した。

ところが、順風の流れは、秋季リーグにおいて一転、逆風に変わった。一部リーグ最下位となってしまう、入れ替え戦となり、延長に次ぐ延長で死闘を演じ、勝利をもぎ取り、最終的に一部残留を決めた。

その時の気持ちは、優勝した時以上の感激や達成感を覚えている。

1年間で、順境と逆境を味わうことが出来たことは、「人生いろいろ、あるもんだなあ〜」ということを教えてくれた。

(3) クラブ活動は、自ら希望したクラブにおいて、1年生から4年生までが共に同じ目標に向かって、汗を流し、喜怒哀楽を重ねながら、心身を鍛え、他大学との交流を深める等、一人の人間として、よき社会人としての幅広い体験が出来たと思う。

そして、クラブ活動ではあったが、夢が実現できたことは、「やれば出来る」「決してあきらめない」と言う自信と大切さを与えてくれ、事後の自衛隊生活や人生に、様々な形で後押しのバックボーンとなった。

又、第2の人生においても、このように元気一杯働けるのも、クラブ活動で鍛えた体力・気力の賜物である。まさに防大のクラブ活動は、人を鍛え、こころを豊かにする確かな道場であり、防大生活の3本柱の一つと言える所以であろう。

6 学問に苦しめられた「その時」

(1) 受験勉強にやや疲れを感じていた自分としては、防大入校の動機でお話したように、「純粋でない気持ち」や「自衛隊に行くのだから心身を大いに鍛えよう」そして「学問の勉強よりも、色々な人間勉強をしたいな」「青春を謳歌したいな」と言うようなことに関心が行ってしまい、学問に対する意識が少なかった。

(2) このような状態であれば、言わずもがなであって、欠点こそなかったが低空飛行の学生時代であった。それでも、1年次に、欠点近い成績を取った科目があり、心配で先生の下に何度か通い、「大丈夫ですか？」と助けを懇願するように惨めな気持ちで頭を下げた。

惨めな気持ちで頭を下げた『その時』、学問が好きとか嫌いとか、得意とか不得手とかの問題ではなく、防衛大学校の本分は、あくまで学問を学ぶことであり、成績が上位か下位かは別の次元であり、それなりにしっかりやって、最低限、欠点を取らず・落第をしないように頑張らないと、つくづく反省した。

爾来、それぞれの課目の得意な同期には、特に仲良くし、何かとお世話になりつつ、少し自己努力して、無事卒業でき、本当に嬉しかった。

(3) 防大で習った学問が、自衛隊や社会生活で、直接的に役に立ったと言うことはほとんどなかった。(但し、研究正面に行く人は別) しかし、卒業後、現時点までを振り返ると、学問や卒業研究は、大学生として学べる最後の本分であると共に、幅広い知識の吸収、複眼的思考能力の醸成、柔軟性・創造性の基礎作り等 ものの見方・考え方・感じ方を広く・深くしてくれたように思う。

きっと自分にも気がつかない内に、教養という観点から脳内に埋め込まれたのかもしれない。多くの皆さんは、2度と学ぶことのない今ある貴重なチャンスを逃さず、それなりに頑張っ
て欲しい。

7 横、縦、斜めのつながり（絆）を持てた「その時」

(1) 初めての学生寮生活、何から何までの規則詰めの団体生活、上級生からの優しそうで厳しい指導助言、絶え間のない敬礼の連続、ゆっくり出来なかった入浴と食事、2人以上は整列行進、眠くないのに寝なければならない・起きたくないのに起きなければならない等、入校当初に感じた、挙げれば枚挙に暇がない不可思議な学生舎生活であった。

(2) 『その時』思ったことは、高校時代の生活と比較すれば、ビックリ仰天かもしれないが、軍隊組織しかも将来部下を指導する幹部を育成する大学校という観点から見れば当然至極の生活である。又、姿・形から入るのも一つの形態であって、止むを得ないと言うように、割り切った。

又、日々の生活での指導官や上級生からの罵声や強烈な指導も、自分を鍛えてくれているんだ。更に基本訓練・野営訓練や各種競技会を通じての妥協を許さない練習も、目新しさや好奇心に加え、同僚も同じようにきついんだ、先輩も辿ってきた道を乗り越えたんだという風に、自分に言い聞かせガマンした。

(3) 今思えば、この生活は、自衛隊生活を送る上で、様々な時と場所において、精神的にも肉体的にも社会的にも、色々と役に立ったと思う。又、このようなことが、一見不合理のように学

生時代には見えたが、実は、軍事行動面からは全て合理性があることに気づいた。さすが防大の教育訓練！！と感じた。

更に、クラブ活動を含め、学生舎生活を通じて、先輩・後輩と言う「縦のつながり」の絆を持つことが出来たお陰で、自衛隊の仕事面においても私的な面においても、大いに面倒を見ていただいた。顔見知りほど心強いものはない。これは最高でした。

さらに言うならば、積極的に他大学生との交流や地域の人達とのふれあいに努め、井の中の蛙にならぬように努めて欲しい。即ち、「斜めのつながり」である絆を築いてもらいたい。

いずれにしても、「横のつながりである同期・同級生」を中心に「縦のつながりである先輩・後輩・教官」「斜めのつながりである他の大学生・地域の人達」の3つの絆をしっかりと張り巡らせることが大切であると思う。(柱と梁と筋交い・・・強い耐震構造)

8 まとめ(贈る言葉)

(1) 時代や世代や社会の変化に順応・適応(柔軟性・創造性の涵養)

人は変化に順応したり適応したりしないと、取り残されたり、孤立化したりする。変化に順応・適応するためには、色々なことを学ぶことが出来、失敗も許される学生時代にこそ、変化を恐れず、多くのことに挑戦して柔軟性や創造性を養って欲しい。

(2) 夢や希望を失わず、決してあきらめない、必ず陽は又昇る。(ナニクソの精神)

防大と言う4年間のトンネルの中に、今入った所。トンネルは、少し暗いかもしれないが、必ず明るい出口が待っている。その明かりを目指し、ナニクソと言う気概を持って、決してあきらめず、前進して欲しい。必ず陽は又昇ると言うプラス思考こそが、夢や希望の実現に大きな力を与えてくれる。先ずは、半年頑張ってみる。次は1年頑張ってみることだ。先々ばかりを考え過ぎず、もっと近い所に目標や視点を置くと、人は意外と頑張れるものだ。

(3) 人生に無駄なものは一つもない(経験の積み重ねは大きな力)

「V S O Pに乾杯」という言葉がある。それは、世代に応じた求められる資質・能力を示唆したもので「Vは、バイタリティ・バライティ(20代以下)、Sはスペシャリティ(30代)、Oはオリジナリティ(40代)、Pはパーソナリティ(50代)」と言われている。

皆さんは、20代以下であるので、バイタリティ・バライティ即ち精神的に色々なことに挑戦して、経験を積み重ね、事後の世代に移るときの貯金にして欲しい。その際に、「こんな事は、無駄だ」と思われる事があるかと思う。

しかし、今は無駄と感じるかもしれないが、いずれかの時期に、何らかの形で役に立つ場面がある。「人生に無駄なことは一つもない」と言うことを信じて、なんでも体験して欲しい。

○ 最後に

「組織は人を育てる。」といわれるが、まさにその通りある。

防大は、私を育ててくれた。自衛隊は、充実感・満足感を与えてくれた。今、私の人生を振り返ってみて、防大と自衛隊という組織に対し、本当にありがたく思っている。

『ワンスモアの人生はない、オンリーワンの人生です！！』

どうか、防大生という誇り・プライドを胸に秘めつつ、一日一日を精一杯、生き抜いて、「かけがいのない防大生活をしっかり満喫して欲しい」そして「卒業後、防大生活に悔いなし」と言える、そんな日々を送って頂きたいと思う。